思春期を迎える児童生徒とその親を対象とした保健所活動の中での保健教育の試み

原　田　祥　子[1)]

要 約：

高齢化社会を迎え、複雑な世相を背影に登校拒否、性非行、家庭内暴力等々児童生徒の心や体の健康被害が根深く進行の様相を呈している。しかし、思春期を迎える学童期においては、保健所も市町村もかかわり合いを持っていないのが現状である。

そこで当所では、学校教育との連携のもとに思春期を迎える子供を持つ親と児童生徒を対象に、親として思春期をどのように理解し、どのように子供に接したらよいのか、児童生徒は健全な成人を目指してどのように有意義に思春期を乗り越えたらよいのか、喫煙予防教育も併せて思春期保健教育を試みているので報告する。

見出し語：保健所活動、思春期、喫煙予防教育、学校教育との連携

Ⅰ　研究方法

1．思春期保健講座の開催

1）目標：①思春期の子供の心と身体の発達を正しく理解し、親自身が子供にどう対応するか考える機会とする。②親子の話し合いのきっかけをつくってもらう。③この講座を通じ、学校、地域、家庭との連けいを深めること。

2）対象と参加者

	対　象	参加者				
		親	養教	教育関係者	児童生徒	計
昭62～63	小学校高学年～中学生を持つ親	78	12	6		96
平元	全上　親子	36	2	2	13	53
平2	小学生の親子	20	4		19	43

3）講座内容：平.2年

	日時	講座内容	対象
第1課	7/5 13:30～16:30	講義「こどもたちへのメッセージ」思春期保健相談員 講義「今こどもたちは……パートⅠ」中央児童相談所一時保護課長	小学生を持つ親
第2課	7/27 13:30～16:30	映画「こどもたちへ」 講義「タバコのはなし」保健婦 おしゃべりタイム（分散会）	第2課は親子での参加
第3課	8/24 13:30～16:30	講義「今こどもたちは……パートⅡ」養護教諭 講義「性と生へのアプローチ」保健婦	

1）山形県鶴岡保健所

4）講座開設に当って注意したこと

	ねらったこと	実　施　し　た　こ　と
事前準備	1. 親が講座に求めている期待をさぐり、多数の参加を得る。	① 市町村教育委員会や性教育実施校に出かけ情報を得る。 ② 親の本音が引出せ、楽しく受講出来るような企画書の作成 ③ ＰＲ用ちらしを作成し、教育委員会を通じて管内小学校へ協力を依頼 ④ 性教育実施校の養教を講師に依頼し、スタッフ全員が共通認識で望めるよう、母子保健担当保健婦を中心に話し合う。
当日の運営	1. 小グループによる話し合いを通じ悩みや疑問が率直に語られるように。 2. 親子が直接ふれあい交流しあえる場に 3. 関係機関との連けいをつよめながら	① 母親、養教、保健婦の混成８名位のグループを編成、おしゃべりタイムを設定 ② 参加者がリラックス出来るようにＢＧＭ、コーヒータイム等設定 ③ 夏休みを利用して子供達も参加出来る親子教室を組み入れ映画「こどもたちへ」を親子で鑑賞、又子供達の作ったおやつを試食。 ④ スタッフは進行係の他、親の立場で養教と話し合う中で、学校と家庭の実態を参加者に気づいて貰うよう努めた。 ⑤ 昭和63年度には学校関係者、保健婦等を対象に思春期保健指導者研修会を開催し、指導者の資質の向上と関係機関との連けいをつよめた。
事後整理・評価	1. 目標の達成度を知る	① グループでの話し合いの中で、参加者の気づきに注意する。 ② 課目終了時のアンケートにより把握 ③ 課目実施前及び実施後のスタッフのミーティングの中でふりかえりを行う。

2. 中学生を対象とした喫煙予防教育の実践

1）喫煙予防教育の目標：①喫煙が及ぼす体への影響の理解、②受動喫煙についての理解③喫煙行動の予防、④家庭、友人、地域への波及効果

2）これまでの経過と実施状況

① 63年に管内中学校（１９校）、高校（１１校）、国立高専（1校）を対象に、学校における禁煙教育の実態についてアンケート調査を実施したところ、教育は中学校より高等学校に実施率が高く、中学校においては小規模より中規模、大規模校において実施率が高かった。医師、保健所との連けいを望む学校は５５％あり、学校独自で行うとした学校は１９％弱だった。また、父兄にも呼びかけを行い、地域が一体となって実施すべきとする意見もあった。又、保健所に対する期待としては、高等学校では資料や情報の提供等側面的期待が多かったが、中学校では保健婦による喫煙予防教育を期待する学校もあった。

実施状況

学習段階	ねらい	対象	実施内容	実施結果
H 1. 6. 20 ～12. 12	○喫煙によって起こる体への影響について理解する。 ○家庭で話題にする。 ○学校現場における状況を話し合い、今後の喫煙予防教育の在り方を協議する。	A中学校1年生（229人とその父兄	○たばこに関する学習前の意識調査	回収数 生徒　224人（97.8％） 父兄　197人（86.0％）
			○医師による喫煙予防に関する講話	参加者数 生徒　226人（98.7％） 父兄　105人（45.9％）
		A中学校1年生	スライド「バイバイたばこ」15分 グループワーク（保健婦従事）25分 1グループ　1・2・3組 2グループ　4・5・6組	参加者数 226人（98.6％）
		A中学校1年生（229人）とその父兄	○たばこに関する学習後の意識調査	回収数 生徒　223人（97.4％） （男子115人・女子108人） 父兄　190人（83.0％）
		指導者	○研修会並びに協議会	
H 2. 7. 10 ～12. 末	○喫煙と生命の尊さを実感できる。 ○喫煙は喫煙する人だけの問題ではなく、周囲への影響等について理解する。 ○家庭、友人、地域等で話題にする。 ○学校における喫煙予防教育の進め方を協議する。	A中学校2年生（227人）	ビデオ「たばこがからだを蝕む」27分 実験「たばこのタールでガーゼが黒くなり水が濁り悪臭を放つ」15分 （クラス単位に実施）	参加者数 225人（99.1％）
			○たばこに関する学習後の意識調査	回収数 200人（88.1％） （男子97人・女子103人）
		A中学校全学年、父兄、指導者	○研修会「若年層への喫煙予防教育を効果的に行うために」	参加者数 37人

3）実施に当って注意したこと

① 63年度調査結果をもとに教育事務所や市教育委員会の協力を得た。

市教育委員会→市中学校長会にはかってA中学校の指定となった。

② 「喫煙予防教育実施要領」をもとにA中学校生徒指導部長と教育のすすめ方について話し合う。養護教諭とも十分連携をとりながら、1年生をもち上り、3年間継続して教育をすすめることにした。

③ 初年度には、教育実施前後の生徒、父兄の意識調査を重視してみたが、父兄の喫煙予防に対する関心の強さには驚かされた。また父兄の保健所への要望として「健康に及ぼす影響の情報提供」が非常に多くだされた。

④ 2年度の教育は、命の尊さを強調し、より印象に残るように、視覚に訴えた教材を使用した。集中した学習が出来るようにクラス単位で学習を行い、その後意識調査を実施した。

⑤ 成人保健担当保健婦を中心に指導案を作成し、「タバコの教科書」で勉強会を行う等、意志統一してHRにおける教育に望んだ。

Ⅱ 結 果

1．思春期保健講座について

1）親の気づき

アンケート調査にみる親像は、初経時の印象を「不安」「驚き」「嫌」等、暗いイメージでとらえており、学校や親からの教育も処置だけのものが7割を越えている。又、自分の子供に教えたと言う回答は約5割あり、教えたきっかけとしては「身体の発達を見て」「入浴時」「子供から質問されて」が多く、子供との日常的会話はほとんどの親が「よくある」と答えている。男子の第二次性徴発達過程については、正しく理解しているものは少ない。

①性について、具体的にどんな言葉で、何をきっかけに話したら良いのか。

②部屋の中でエロ本を見つけた時どう対応したら良いか。

③感情の起伏が激しく情緒不安定な時がある。等々が話し合われ、その他子供の心身の発育、夫婦のあり方等も含めて家庭での性教育の不安、むずかしさ等が具体的に話し合われた。

2）子供の気づき

①小学5年の女子は映画を見て「赤ちゃんを生むことの大変さがつくづくわかった」、6年の女子は「命の大切さ」を学んだと書いている。

3）学校側の気づき

①個人差にどう対応したら良いか。

4）保健婦側の気づき

①グループの司会を受持ちコーディネイトするなかで、日頃の悩み、疑問をどう方向づけたら良いのか、教育技術も含め、学ばねばならない。

②親子を一緒に参加させたとき、子供の年齢が違うとプログラムを画一的に進められない難しさがある。

2．中学生を対象にした喫煙予防教育について

アンケート調査より生徒の反応を平成元年と2年を比較してみた。

1）生徒の喫煙経験は表1のとおり「有り」が前年より増加しているが個別に卦書で回答を求めたのが影響したのか。

表1. 生徒の喫煙経験

	区分	ある	ない	合計
H1年度	数	11	213	224
	率	4.9	95.1	100.0
H2年度	数	19	181	200
	率	9.5	90.5	100.0

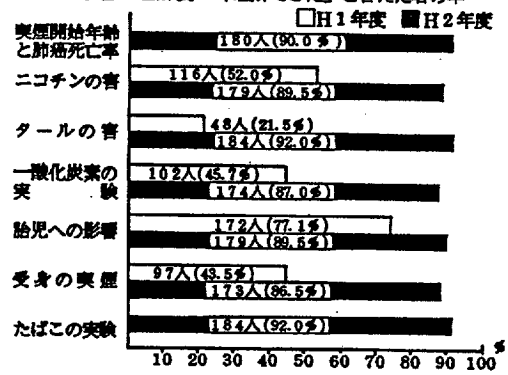
2）学習の理解度

図1のとおり、前年に比較し、すべての項目に理解が深められた。

3）喫煙を勧められた時の対応

図2のとおり、前年に比較し、「きっぱりと断る」が男子66％、女子83.5％といずれも増加したが、男子の「相手にやめるように話す」が減少し、「ためしに吸ってみる」が増加した。しかし、女子においては「ためしに吸ってみる」が5％から3.9％と若干減少した。

図1. 学習の理解度　「理解できた」と答えた者の率



4） 将来の喫煙傾向

図３のとおり、昨年に比較し「吸ってみたい」と答えた男子７％、女子1.9％はほぼ変らないが「吸わない」と答えた者は男女共減少し、「どちらとも言えない」と迷っている男女が共に増加した。

5） たばこの害についての話題

「話した」が全体で40％、男子では25.8％、女子では53.4％で女子が多く話題にしている。

「誰れに」では表２のとおり、男子は父母に90.7％、中でも父が多かった。女子では父母に約90％、中でも母が56.4％であった。

図2. 喫煙を進められた時の対応

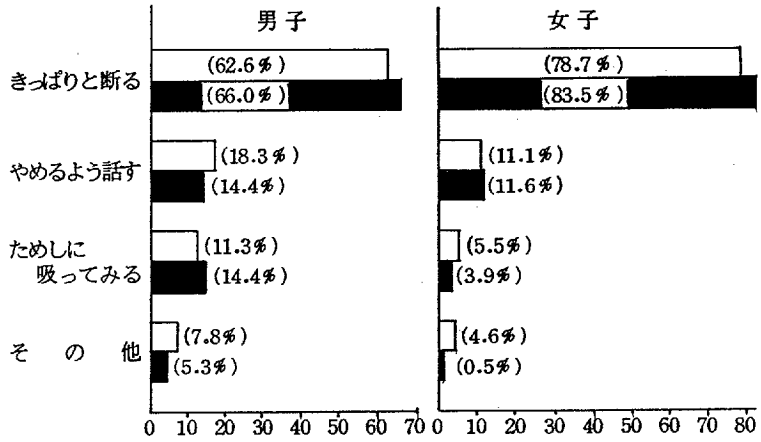


図3. 将来の喫煙傾向

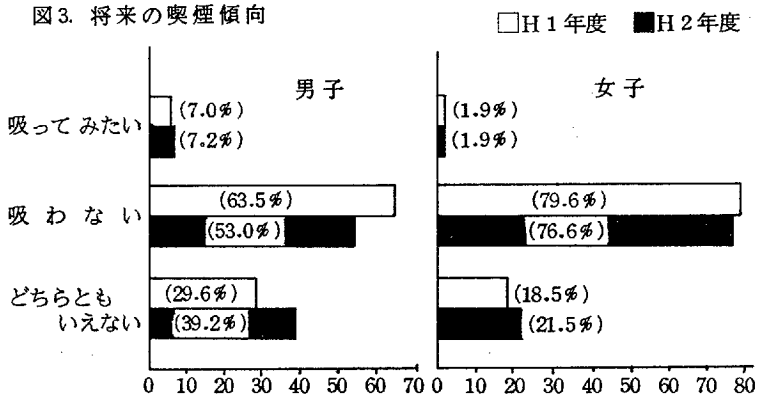
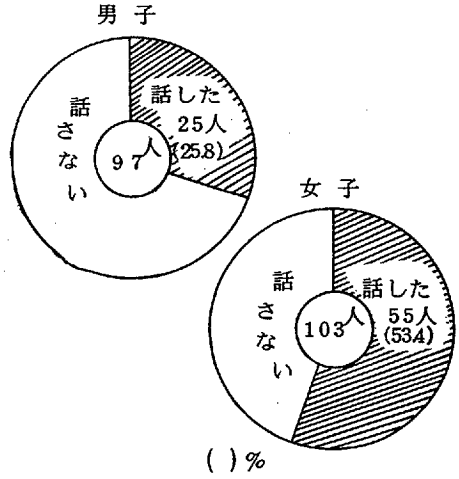


表2. 誰に話しましたか（複数回答）

	父	母	兄弟	友人	その他	計
男子	16 (50.0)	13 (40.0)	1 (3.1)	1 (3.1)	1 (3.1)	32 (100.0)
女子	26 (33.3)	44 (56.4)	3 (3.9)	1 (1.3)	4 (5.1)	78 (100.0)
合計	42 (38.2)	57 (51.8)	4 (3.6)	2 (1.8)	5 (4.6)	110 (100.0)

図4. たばこの害についての話題



Ⅲ 考 察

保健所活動として、生命の尊さをベースに思春期保健講座と喫煙予防教育を実施してきたがまだ日も浅く、とまどいや反省も多い。

以下、気づいた点を列挙してみよう。

1. 主な効果

1）関係機関との連携、調整機能の充実

2）養護教諭との円滑な情報交換が出来るようになった。

3）専門的保健婦への足がかりがつかめてきた。

4）視聴覚教材を用いた教育の大切さを実際体験出来た。

5）学校教育関係者と合同の事例発表や研修会の開催が可能となった。

6）思春期保健講座への参加がきっかけとなり、小学校ＰＴＡで思春期に関する研修会を開く等、地域への波及効果がみられた。

7）管内５高等学校の文化祭に喫煙予防コーナーが設置された。（平．２）

8）管内の１高等学校で養護教諭が、１年生各クラスへ授業を受持つようになった。

2. 促進的要因

1）保健所長が学校教育に非常に関心を抱き予防教育に熱心である。

2）保健婦が従来の保健所業務と言われる法に基づいた事業の実施に疑問を持っていた。

3）現在の市町村保健行政は、老人保健事業の推進に追われ、学校教育にまで入りこむゆとりがない。

4）保健婦以外の職員との連けいによる教材の開発

5）保健婦が、グループ制の業務分担制を試行しており、両教育への協力体制があったこと。

3. 阻害的要因

1）保健所が学校に近ずいて教育を受持つということへの圧力

2）思春期の子を持つ親への教育においては保健婦自身の人生観、生き方が問われ、学問的にも技術的にも経験不足である。

保健所活動の中での思春期への対応や、中学生に対しての喫煙予防教育は、行政としての枠もあり、難しい面もあるが、あくまでも生命の尊重を柱に父母や子供達が共に考え共に学び合える教育の場を目指した活動を行っている。

まだ歴史も浅く、技術的にも未熟ではあるが今後とも成人病予防、健康づくりをも含めた巾広い人間教育を目指してチャレンジしてゆこうと考えている。

Ⅳ 文 献

o思春期の愛と性　村瀬幸浩・梶島史子　堀口雅子・上妻善生著

o青春期内科診療ノート　森　崇　著

oみんなで取り組む性教育　全国養護教諭サークル協議会企画

o喫煙と健康に関する指導方法の確立とその効果　昭.59年度、61・62・63年度　班長 簑輪眞澄

oタバコの教科書　日本禁煙協会

o公衆衛生活動のために　全国いきいき公衆衛生の会編著

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:
高齢化社会を迎え、複雑な世相を背影に登校拒否、性非行、家庭内暴力等々児童生徒の心や体の健康被害が根深く進行の様相を呈している。しかし、思春期を迎える学童期においては、保健所も市町村もかかわり合いを持っていないのが現状である。
そこで当所では、学校教育との連携のもとに思春期を迎える子供を持つ親と児童生徒を対象に、親として思春期をどのように理解し、どのように子供に接したらよいのか、児童生徒は健全な成人を目指してどのように有意義に思春期を乗り越えたらよいのか、喫煙予防教育も併せて思春期保健教育を試みているので報告する。